

# フレンズ

## 第25号

特別養護老人ホーム  
短期入所生活介護事業  
通所介護事業（4カ所）  
認知症対応型通所介護事業（2カ所）

発行日 平成22年11月25日  
居宅介護支援事業（2カ所）  
地域包括支援センター（2カ所）  
（世田谷区委託/介護予防支援事業）

## 孤立死に思う

— 縁あっても、なお避けられなかった事例 —

統括施設長 飯田能子

### ハイライト

○巻頭言

#### 孤立死に思う

- 縁あっても、  
なお避けられなかった事例 -

○特集

#### 「孤立死を防ぎたい」

○フレンズ祭り 報告

最近の新聞の報道によると、98自治体の運営する公営団地内で、誰にも看取られずに孤独死した人は、平成21年度に少なくとも1192人おり、その7割が65歳以上の高齢者であった。また、そのうち東京都営の団地の高齢者が約400人で最も多く、二番目の大阪府営の130人を大きく引き離している。

孤立死は、孤独死と同義で使われ、厚労省が平成20年3月に公にした『高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議（「孤立死」ゼロを目指して）一報告書一』に見るように、「孤立死」が行政用語として使われるようになった。いずれを用いるにしても、都市部の集合住宅は、各戸が物理的に閉鎖的であるため閉じこもりがちになり、配偶者との死別や病気、定年退職・失業などにより社会関係・人間関係が希薄になっている状況から、独居老人が支援の対象になってきた。

フレンズホームに隣接する都営下馬2丁目団地の平成21年度の孤立死は4件と公表されている。世田谷区から委託されている地域包括支援センター（下馬あんしんすこやかセンター）の管轄区域にある団地周辺を、スタッフは高齢者の安否確認や実態把握で日々走り回っている。孤立死防止に地域包括支援センターはどのように取り組ん

でいるのか。本紙掲載の座談会をお読みいただきたいと思う。

孤立死を防止するために、地域社会が取り組む方法や手段として、民生委員や近隣住民による安否確認、ミニデイやサロンなどの自立支援プログラム、コミュニティのネットワークの構築、それらに関わる社会福祉法人の事業所スタッフの存在などがある。いわば、独居であっても無縁社会にしない仕組みづくりである。

無縁社会にしない仕組みづくりは、ソーシャルワークの専門領域であろう。にもかかわらず、私にはソーシャルワークには限界があることを思い知らされる孤立死が身近に起きた。独居の男性A、Bとしておこ。両者に共通するのは、年齢は80歳台で妻が特養ホーム入居者であり、子どもはなく、親類縁者は近くに住んでいない。妻に対する虐待行為（Aは経済的虐待と介護放棄、Bは身体的虐待）があった。Aは厚生年金受給者で介護保険負担額は第4段階、Bは元調理職人で負担額は第2段階である。Aは持ち家、Bはマンション（自己所有）なので、差し当たり衣食住には不自由しない人たちであったが、配偶者の施設入所をめぐって世田谷区の保健福祉部のケースとなった。

彼らの妻たちは特養ホームに入所して5年以上が経過している。当初は、

### 目次:

巻頭言	
孤立死に思う	1
特集	
孤立死を防ぎたい	3
孤立死を防ぐ 職員座談会	5
第2回 フレンズ祭りから	7
連載	
リレーエッセイ 地域の絆	
第2回 こころの交流会	8

面会時に親しく会話を交わしている夫たちの姿が散見された。Aは、やがて閉じこもりがちになり、隣人の通報で区のケースワーカーとホームの相談員が駆けつけて、救出した。極度の脱水症状であった。身体状況では介護保険サービスの対象にはならなかったが、安否確認の対象であった。一方、Bは、もともと歩行障害があったが、歩いて妻の面会に毎日のように通ってきていた。自宅の階段で骨折し、入院するも、全快を待たずに、医者への制止を振り切って退院してきている。Bにはケアマネジャーが付いていたが、訪問介護サービスの更新時に医療機関受診を拒否し、その後はサービスを使っていなかった。

Aは、死後約1週間、隣人の通報で発見され、Bは死後約1ヶ月、異臭に気づいた近隣住民の通報で発見された。彼らの独居死は、彼らを選択したライフスタイルと無関係ではない。孤立や孤独と他人から言われようとも、独居を選択したのである。クラブ活動費を払いたくないので、妻に参加させない。自分で購入してきたジュースを経管栄養の容器に勝手に注入してしまう。他人の意見は容易に受け入れない。彼らは、いわば福祉の業界

用語の「困難ケース」であった。

しかし、「他人の世話にならずに自分だけで生活する」「他人の忠告・助言は余計なお節介」は自立自助の裏返しでもあろう。他人との付き合いを極力避けて生きてきたことの結末を、ソーシャルワークの敗北として片付けるには、「人間の生き方・死に方の流儀」はあまりにも崇高で厳粛である。縁を避け、独居死を選択した人生を肯定したい私自身がここにいる。(2010.11.19 記)



エレベーターのない5階建の都営下馬2丁目団地立替え工事が一部始まっている

.....  
**地域包括支援センターとは...** 平成18年4月1日から介護保険法の改正に伴い創設された機関です。

高齢者の方々が、住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせるように、様々な支援を行うための総合相談窓口です。世田谷区には、27箇所に設置されていて「あんしんすこやかセンター」との名称になっています。窓口では、保健師（または看護師）、社会福祉士、主任ケアマネジャーの3種の専門職員が相談に応じています。

**介護保険負担額とは...** 費用負担段階は、世田谷区の住民税課税状況や年金収入額等によって、区介護保険課で査定しています。そして該当者には「介護保険負担限度額認定証」を発行して、施設入所、ショートステイ等の滞在費・食費を減額しています。

●参考

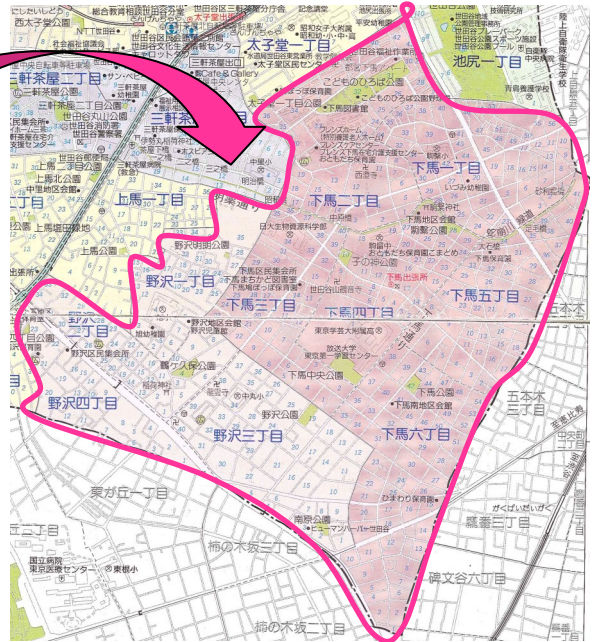
- ・第1段階 住民税世帯非課税の老齢福祉年金受給者、生活保護受給者
- ・第2段階 住民税世帯非課税で合計所得金額及び課税年金収入額の合計が年間80万円以下の方
- ・第3段階 住民税世帯非課税で第2段階に該当しない方
- ・第4段階 住民税課税世帯に該当する方（減額はない）

# 特集 孤立死を防ぎたい

誰でもいつかは「その時」を迎えます。それが「いつなのか」は、予測できませんが、できれば「よりよく生きたその人の、人生のゴールにふさわしい尊厳ある死」であってほしいと願うものです。しかしながら、核家族化が進んだ現代社会においては、必ずしも昔ながらの「家族や親しい人たちに見守られての在宅死」が、当たり前ではなくなりました。

世田谷区は平成19年度に、東京都の「高齢者孤立死防止推進事業」のモデル区市町村に指定されて、マニュアルを整備するなどの取組みを重ねてきていますが、その中で孤立死の根底には地域社会からの孤立があるということがみえてきました。

本号ではその実態を、下馬あんしんすこやかセンターの活動から検証してみました。



**【下馬あんしんすこやかセンターのエリア特性】**  
 担当地域・・・下馬1～6丁目・野沢1～4丁目  
 面積 **2078** k m<sup>2</sup>  
 総人口 **40775**人  
 高齢者人口 **7938**人    高齢化率 **19.5**%  
 うち下馬二丁目団地 **1105**人  
     一人暮らし **192**人  
     高齢者世帯 **71**人  
 (H22.4.1時点 世田谷区調査より)

## 孤立死の事例 — 下馬あんしんすこやかセンター担当地域より —

年度	年齢	性別	介護保険認定	利用状況	発見のきっかけ	発見までの期間
平成20年度	70代	女性	あり	訪問介護	担当ケアマネジャーより連絡	2日
21年度	70代	女性	なし	なし	隣人	不明
22年度	70代	男性	あり	訪問介護	ヘルパーより	5日
	80代	男性	なし	なし	新聞配達所	5日
	80代	女性	あり	訪問介護	訪問介護	3日
	90代	女性	あり	訪問介護	配食サービス	2日

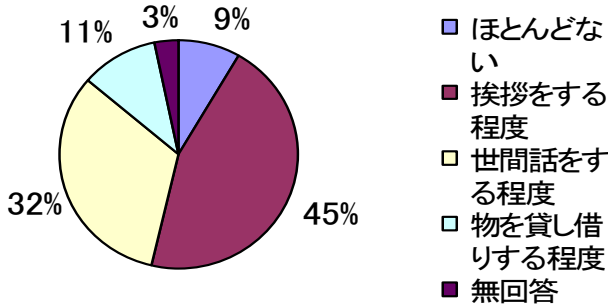
世田谷区では『孤立死』を「誰にも看取られず自宅で死亡し、死後、日数を経過し発見されること」と定義しています。

# 「世田谷区全高齢者実態把握調査」一人暮らしの方の報告から

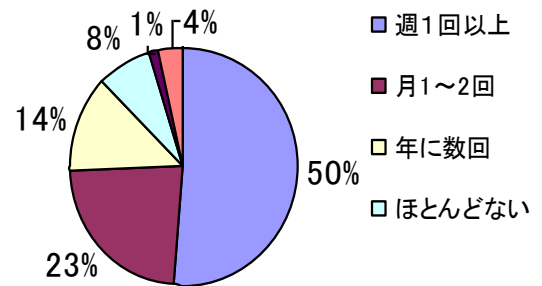
H21年に世田谷区が行った「世田谷区全高齢者実態把握調査」では、下馬あんしんすこやかセンター地域は**5399**人の回答があり、うち一人暮らしが**1016**人（**18.8%**）となっています。

その調査の中の設問から、一人暮らしの方（**1016**人中）の結果をみると

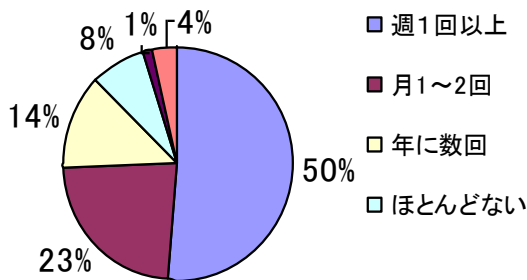
## 近所付き合いの程度



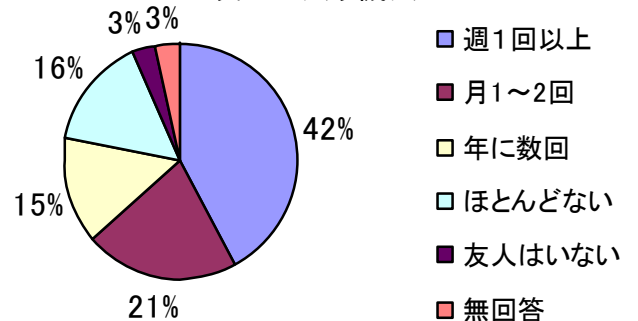
## 同居以外の家族や親戚と手紙や電話などで連絡をとる機会



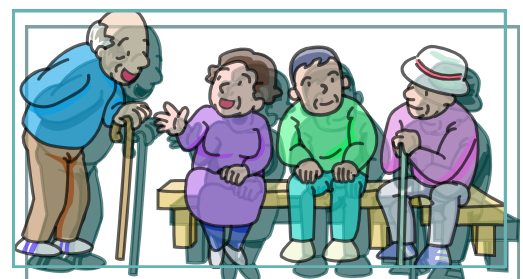
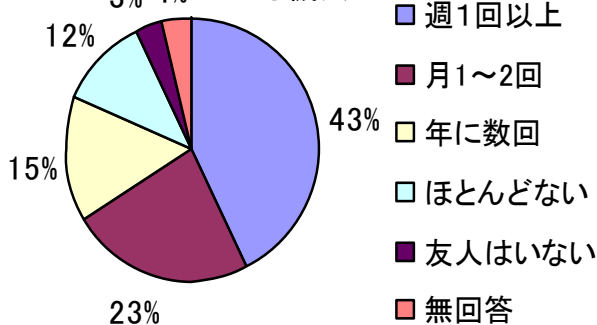
## 同居以外の家族や親戚と手紙や電話などで連絡をとる機会



## 友人と会う機会



## 友人と手紙や電話などで連絡をとる機会



人との関わりが週1回以上ある人がほぼ3分の1以上を占めていますが、年に数回やほとんどない、親族や友人がいないと回答している人も3分の1くらいを占めており、孤立死の要因となると考えられます。

# 座談会「孤立死を防ぐ」

出席者：下馬あんしんすこやかセンター職員

堀内 三田 佐久間 河口 保里

司会者：鍋田 浩（広報委員会委員長・在宅介護部長）

**Q. 高齢者の独居率が高い下馬団地に近い 下馬あんしんすこやかセンター（以下「支援センター」と記載）としては、一人で亡くなる人に関わることが多いんじゃないですか？**

**A:** 私が関わった人は、他人と一切付き合いたくない人で、たまたま実態把握で入れてもらったけど、誰も家にいない、ヘルパーも来ていない。隣の人がいっつも電気を見てくれたから気付いたのね。

**B:** 今年の夏に亡くなった人も隣近所との付き合いがなかった。家族とも疎遠。だからなかなか発見されなかったの。支援センターでも会ったことはない人だった。



**C:** ミニデイとかサロンなどの場に出てきてくれる人は、周りが気づいてくれるから問題ないのよね。

**B:** 介護保険を使っている人も、週1回は誰かしらが入っているし、月1回はケアマネジャーが訪問しているから、一週間の間には見つけてもらえる。

**D:** この間の人はずっと元気で暮らしていて、亡くなった前日にも甥とお寿司を食べたんだって。でも発見まで数日かかったから、定義としては孤立死になるけれど、ヘルパー、ケアマネジャー、親族との関わりもあるから、孤立死の分類には入らないと私は思う。やはり周囲と関わりのない人の孤立死が課題かなあと思う。

**Q. 近所との付き合いがない人は、誰が発見するの？**

**A:** 宅急便の人が見つけることもある。近所の人臭いに気づくこともある。

**B:** 新聞販売所と区が協定を結んでいるので、区には新聞配達の人から結構通報があるみたい。

**C:** うちにも2件くらい連絡があった。

**D:** 近所を拒絶する人も、新聞や配食は自分の意思で契約して受け入れているから抵抗ないんでしょうね。いい見守りの資源になっている。



**C:** 以前には「おはよう訪問（注1）」のヤクルトからよく通報があったよね。1週間に1回。月2回くらいは問い合わせがあった。サービスが無くなって残念。

**Q. 印象として、拒絶したり、孤立する人がふえている？**

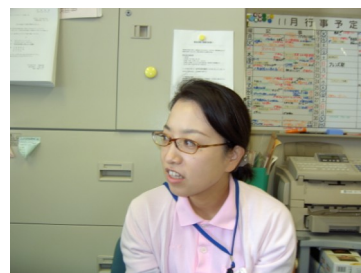
**C:** 去年、世田谷区では「全高齢者実態調査」を郵送で実施して、回答率が73%と結構高かったんだけど、印象としては、相談に来る人の中には、未回答の人も多いかな。支援センターに関心もなく、自分は大丈夫と思っている人が、急に困ってどこに相談に行ったらいいのか、慌ててしまう。

**D:** プライバシーを強調する人もいて、調査にも個人の情報を提供したくないというのもあるね。

**Q. 支援センターもなかなか会ってもらえない、そんな人をどう見守っていったらいい？**

**A:** 定期的に回って行くしかないのかな。

**C:** 困った時に「困った」って言ってもらえない人が今問題。



（注1）世田谷区で、昭和53年度～平成18年度まで実施された、ひとり暮らし高齢者の見守り事業。ヤクルトを届けて安否確認が行われる。

A：訪問した時は「今困っていない」と言われてそのすぐ後から、相談に来たりすることもあるよね。



**Q. 支援センターの職員は、たくさん業務を抱えています、支援センターだけで見守るというのも無理じゃない？**

C：地域には、介護保険事業所、福祉サービス、社会福祉協議会、町会、支援センターミニデイやサロン、自主グループなどいろいろな見守りの目がある。でも、それぞれが別々に見守りをしている状況。整理や役割分担ができていないことが、今後の課題になってくると思う。個別のフォローやサポートは必要。それは私たちの役割かな。あとは新聞や配食など、遠まわしな見守りが大きな力になる。

A：団地では、長く館長をしている人が、地域の事情をよく知っていてキーパーソンになる。

B：団地の構造も影響する。横に長い廊下だとお互いに声をかけやすいし、つながりがあるみたい。

A：10年前は近所でお茶飲みをしていたのに、最近はお茶飲みする家がないということも聞くよね。



C：高齢化すると誰かが仕組みとして、横のつながりをつくることをサポートしていかないと、高齢者だけでは難しい。そういう意味

で、ミニデイは大事な場になっている。

B：体操の自主グループの立ち上げを手伝っているけれど、介護予防だけでなく、つながりを作る場にもなっているよね。

A：でも、来ている人は大丈夫だけど、そういう場に来られない人がどうしているかということもあるよ。都の住宅局では、80歳以上の一人暮らしのところに訪問してくれている。

E：訪問した家で聞いた話で、一人で死ぬかもしれないと不安だったんだけど、相談

員のアドバイスで、同じ棟の人と親族に鍵を預けるようにしたので安心したって話してた。

C：町会長、自治会長、民生委員さんは、個別での支えになる。地域の人だから、信頼もある。民生委員さんとは先日懇親会をしたんだけど、個別の事例も話ができてお互いによかった。続けていきたい。町会の人も災害時要援護者支援の取り組みで回っている。そこで何か問題があれば、支援センターにも相談がある。個人情報扱いで難しい部分もあるけど、見守りの情報はありがたい。

**Q. 支援センターとして、地道に関わっていくしかないけど、これから行政にお願いしたいことは？**

A：何といたってもマンパワー。人が足りないのではどうしようもない。

C：支援センターの本来の機能が発揮できるように体制を整えてほしい。見守り事業の区の立場をはっきりさせてもらいたい。

「区としてはこういう考えなのでこうしてください」と、支援センターにめざすところを示してくれた方が、私達がすることがはっきりする。他区の直営のセンターの話だけど、区としての方針と、現場と照らし合わせて足りない事、どうしなくてはいけないかを明確に示していた。

E：保健師学会で介護予防課の保健師さんが、区の見守りについて発表をしていた。たまたま聴きに行くと、世田谷区でも参加していることを知った。そういう情報もほしい。

**みなさんありがとうございました。**



平成22年11月世田谷区委託事業  
はつらつ介護予防講座より  
下馬まち作りセンターにて

# 第2回 フレンズ祭り ご協力ありがとうございました！

(フレンズバザーより通算12回)

第2回フレンズ祭りが、去る11月21日(日)、秋晴れの中行われました。

当初は、10月31日(日)に予定されていましたが、季節外れの大型の台風が日本列島に接近し、上陸するおそれもあったため急遽日程を変更して行われました。

このような中でも、皆様のご協力のおかげで、来場者数約200人、売上約28万円と、例年通り、盛況の内に終わる事ができました。



昨年から始まった、地域の演芸発表会会場には、喫茶コーナーを隣に配置して、飲みながら、食べながらの鑑賞もできました。

ファイナーレイ・ロケラニ(大人グループ、子供グループによるフラダンス)、かがやきの会の皆様(舞踏)、百寿会の皆様(民謡)カレア会の皆様(斉唱、フラダンス)といった方々に、ご参加いただきました。どの会の皆さんにも、日頃の練習の成果を発揮していただき、楽しいひと時になりました。



今年もネギ、カブ等の野菜、生活クラブ生協のおいしくて安全な食品が並びました。



山本先生の年賀ハガキ用オリジナル手作りゴム印のコーナー 来年はなに年だったかな。うさぎ年！



えこひろばの方々に来ていただき傘の修理、布ぞうり作りを行いました。物を大切に使うことを伝えます。

園芸ボランティアひまわり、生活クラブ虹のまち、下馬生活学校、えこひろば各位、山本道子先生、ご利用者、ご家族より**38,390円**のご寄付をいただきました。ありがとうございます。

今年から始まった上馬デイ職員による似顔絵コーナーは、人が途絶えることなく大盛況！  
20歳若返った自分の肖像画に思わずニコリ。

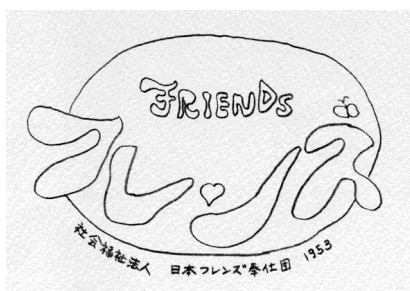


4階バザー会場には、沢山のお客さん



お祭りが終わって 皆で記念撮影

〒154-0002  
世田区下馬2-21-11  
電話 03 (3422) 7211  
Fax 03 (3422) 7227  
Email info@n-friends.or.jp



であい・ふれあい  
地域のささえあい

ホームページもご覧下さい。  
<http://www.n-friends.or.jp/>

- 世田谷区下馬2-21-11 Tel 3422-7211(代)  
フレンズホーム  
フレンズケアセンター・認知症デイ「くつろぎ」  
下馬あんしんすこやかセンター
- 世田谷区三軒茶屋2-32-14 Tel 5486-6262  
デイ・ホーム三茶  
フレンズ三軒茶屋介護保険サービス
- 世田谷区上馬4-36-9 Tel 5430-8050  
デイ・ホーム上馬  
上馬あんしんすこやかセンター
- 世田谷区野沢3-25-10 Tel 5486-7400  
デイ・ホーム中央・認知症デイ「ひだまり」  
フレンズ介護保険サービス

#### 編集後記

黄色に色づいた公孫樹の葉も落ちて、今年も早師走に入りました。12月1日に、「2010年 ユーキャン新語・流行語大賞」が発表され、その中の「無縁社会」という言葉が目にとまりました。今夏、住民票上では生きている100歳以上の方々の問題が世間を騒がせたからでしょう。家族の中でも生存を知らない、そんな「繋がりのない関係」が話題になりました。それとは対照的に、先の流行語大賞にもある「ゲゲゲの女房」は、昭和の時代、家族や近所の皆で手を取りあい生活をしていた頃を「懐かしく呼び戻してくれたこと」として選ばれていました。流行語は今の世相を写す言葉です。来年は悲しい言葉が減り、楽しい言葉が増えるよう願うものです。

私は、世田谷にゆかりがあるサザエさん一家を良きお手本とし、春待月に家族と桜新町に出掛けたいと思います。(K)

＝連載＝ リレーエッセイ 地域の絆 ③ こころの交流 ー特養での世代間交流ー

核家族化が進行した現代社会では、子供たちと高齢者がふれあう機会は少なくなっています。フレンズホームでは、合築の「おともだち保育園」の子供たちとの交流を積極的に行っています。初めのうちは子供たちも、先生の顔ばかり見ていたり、指示がないとその場から動かず、子供たちと利用者の心と体の距離が遠く感じられました。しかし時間が経つにつれ、また訪問を重ね、交流を続けていくうちに、接し方に変化が出てきました。話し方はもちろんのこと、利用者に抱きつく子供もいるようになりました。利用者も、かわいい小さな訪問者とのふれあいは、とても楽しいひとときであるようで、皆心待ちにされています。ある子供の母親と接する機会があり、その母親からは「このような交流があることで、お年寄りに対する優しい気持ち生まれ、子供たちの成長にとって、とても大切なことです。」との言葉をいただきました。

これからの老後は、知人・友人、地域のネットワークや、社会的サービスに頼らざるを得なくなります。子供に限らず、多様な人との交流があることにより、活性化して、持続可能な社会になる。そうした社会の中に絆が生まれていくのではないかと思います。(フレンズホーム相談員 今坂寛子)

